

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	たなか あいこ 田中 亜以子	所属・職名 人間環境学研究科 博士課程
発表題名 (英語)	The “Legitimate” Mistress: Intimacy and Money in Late 19th Century Japan	
著者名	Aiko Tanaka	
会議名 (英語)	The 9th International Conference on New Directions in the Humanities	
開催地(国、市)	スペイン、グラナダ	
参加期間	2011年 6月 8日 ~ 6月 11日	
<p>国際学会で発表するという事は、いかなる経験なのか。特に、日本の近代というスペシフィックな領域を研究対象とする者にとって、国外で発表するという事は、何を意味するのか。発表のためのスライドを準備しながら、学会に参加しながら、そして帰国後に学会を振り返りながら、わたしの頭を離れることのなかった、問いである。いったいなぜ、このような問いのまわりを、わたしがぐるぐる回ることになったのか、そしていかなる結論を得たのか、ここに記してみたい。</p> <p>発表原稿を準備しながら、わたしは、ひとつの不安と、ひとつの困難を抱えていた。</p> <p>わたしの発表は、明治初期の妾をめぐる人間関係を社会史的な観点から明らかにしようとするものであった。そのことによって、性と愛と結婚を一致させる近代的なイデオロギーを、歴史という豊富な具体を以って相対化すること、さらに近代的な夫婦関係に内在する特質を、新たに浮かび上がらせることを目指していた。</p> <p>しかし、わたしは、不安だった。妾の慣行を描き出すことは、いくらアカデミックな場とはいえ、日本といえば“geisha girl”のイメージを、エキゾチックな風習のある東洋というイメージを反復強化してしまうことには、なるまいか。単なる好奇の目によって、わたしの描き出した明治期の人々が、他者化されてしまうのならば、それはわたしの意図に、まっこうから対立することになってしまう。日本という「他者」の過去を、「わたしたち」の現在に、つなげる思考の回路を、聴衆はそれぞれ見出してくれるだろうか。</p> <p>不安だけではなく、そこには困難もあった。翻訳という困難である。そもそも、妾は英語でなんて言えば、いいのか。“Concubine” or “mistress”？ どちらもしっくりこない。しかし、英語で発表するからには、英語という言葉のもっている概念から出発して、説明を試みるしかない。とはいっても、「御恩と奉公」は？「桂庵」は？「見合い」は？</p> <p>バスに揺られていった、丘の上のグラナダ大学の教室で、わたしは未だに不安を抱えながら、聴衆の前に立っていた。“I am so curious.” 発表の直前に、米国の Women’s University の教授に声を掛けられた。そうだろう。まずは来場してもらうことが大切と、興味をそそるタイトルを戦略的につけたのだから。実際、40人くらいの教室に立ち見が出ている。だが、そのことがわたしの不安をいっそう煽る。</p>		

学会発表渡航支援報告書

好奇の目で見られることを不安に思いながら、実はわたし自身がスキャンダラスな効果を利用してしまっているのではないかと。

発表が終わると、いくつか質問の手が挙がっている。先ほどの米国人の女性教授、東ヨーロッパから来たのではないと思われる男性、そして後で友達になったロシア人のエリーナ。いま・ここを共有する「わたしたち」の多様性に圧倒される。質問内容は、ほぼ当時の状況の事実確認——妻の地位は？妾はどの程度蔑視されていたのか？そして、ひとつだけ明治の状況を、唐突に現代日本に接続した質問——今でも日本の夫婦は金銭の授受に関係の基本をおく傾向があるのか？

これらの質問に、わたしは少し、がっかりした。案の定という落胆。初めて聞いた話なのだから、事実確認が多くなるのは、当たり前かもしれない。しかも、この会議自体“humanities”という文学から、文化人類学、社会学、美学、歴史学、政治学まで含む、なんでもありの会議。もっと抽象度の高い議論、あるいは反論や異なる解釈の提示など、期待する方がまちがっているのだとも思う。

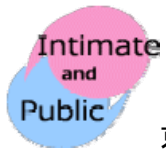
しかし、同時に、自分の研究が解釈される文脈を、もっとコントロールすることができたのではないかと、とも思う。他者化されることを不安に思っているだけではなく、「問題」を「わたしたち」のものにつなげる回路を、もっとわたしが提示しようとしていたのなら、それは「不安」ではなく「困難」として認識されていたはずである。自分の立っている位置から、相手が遠くにいればいるほど、文脈を広げなければ、回路を開通されることはできない。近代日本におけるジェンダー史という枠組みを超え、世界史的観点を獲得する必要がある。

だが、すべての人の多様な文脈に即することは到底不可能である。であれば、結局わたしがしなければならなかったのは、英語で書かれた、あるいは、英語に翻訳された研究の中での、自分の研究の意義を位置づけをもっと前面に打ち出し、焦点をはっきりさせることだったのではないかと。「国際」と名がついていても、共通言語が英語であることは、変えようのない現実なのである。

英語の研究史の中で位置づけられていない不安と、英語への翻訳の困難。わたしが発表準備をしながら抱えていた不安と困難は、英語を軸につながるひとつのものだった。

言うまでもなく、そこには英語圏と非英語圏、あるいは、西洋と非西洋の権力関係が透けて見える。実際、参加者自体もアメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語圏の人々と、欧州人が8割がたを占めるマジョリティなのである。だが、そこから背を向けることを、わたしはしたくない。日本語ではなく、英語というプールへの、知の蓄積に参入すること。たとえ困難であろうとも、その機会は、開かれている。そして、その行為は、自らの思考の幅を広げることでもあるのだ。





京都大学文学研究科 グローバル COE 「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

グラナダの町並み

学会参加者との交流

発表会場にて